

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	塩 川 太 郎（福岡県）
学 位 の 種 類	博 士（文学）
学 位 記 番 号	甲 第 89 号
学位授与の日付	平成 28 年 9 月 25 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 3 項
学 位 論 文 題 目	台湾における地震記念碑とその歴史的意義
論 文 審 査 委 員	主 査 植 村 善 博（佛教大学教授） 副 査 原 田 敬 一（佛教大学教授） 副 査 武 村 雅 之（名古屋大学教授）

### 〔1〕論文の概要

台湾は先住民を除くと中国南部からの移民により開発され、中国的伝統文化の支配的な地域である。かつ、清の支配から日本による植民地化、国民党による独裁的支配、近年における民主化の進行と激動の政治的变化を経験してきた。また、環太平洋西縁のプレート境界の変動帯に位置し、日本と同様被害地震の多発地域である。台湾における地震記念碑についてはその存在や意義について体系的に研究されたことがなかった。本論文は台湾における地震記念碑に関する最初の総括的研究であり、台湾における全ての地震記念碑についてその特徴と意義を文献の精査とフィールドワークにより明らかにした労作である。とくに、記念碑の詳細かつ統一的なデータ収集と分析により、記念碑の目的と設立者、形態と碑文、その後の改竄、慰霊行事について考察し、その歴史的意義を明らかにした研究である。

本論文の構成は以下の通りである。

序論

第一章「台湾の歴史地震」

第二章「1906 年梅山地震の記念碑」

第三章「1935 年新竹-台中地震の記念碑」

第四章「1999 年 921 大地震の記念碑」

第五章「台湾における地震関連の慰霊行事」

第六章「考察」

結論

序論 台湾および日本における地震記念碑研究をレビューし、記念碑の研究目的、統一

的な調査方法と研究視点を導き出している。

第一章「台湾の歴史地震」 日本統治以前と日本統治以後に区分して、地震記録を整理するとともに、主要な被害地震の特徴について要約している。日本統治以前約 300 年間の被害地震は 19 回、日本統治以降の 110 年間で 10 回以上が記録されている。後者において大規模被害を発生させたのは 1906 年梅山地震、1935 年新竹-台中地震、1999 年 921 大地震の 3 回であり、いずれも地震記念碑が建立されていることが判明した。

第二章「1906 年梅山地震の記念碑」 日本統治開始から 11 年後の 1906 年に発生した被害地震で、嘉義地方を中心に死者 1,258 名、全壊 10,402 棟の被害を生じた。中心都市の嘉義は壊滅的被害を受け、復興市区改正事業が実施された。本地震において台湾最古の地震記念碑 1 基が建立され、現在は嘉義公園内にある。これは中国様式の石碑であり、中国語碑文を解読し設立目的と設立者を推定した。

第三章「1935 年新竹-台中地震の記念碑」 台湾史上最大の被害を生じた 1935 年地震では死者 3,279 名、全壊は 17,927 棟に達した。地震記念碑は台中州に 3 基、新竹州に 7 基の計 10 基が建立されている。すべての記念碑について位置、サイズ、拓本の採取と碑文の解読、改竄の状況、慰霊行事の有無について詳細に記述している。また、台中・新竹両州の記念碑には大きな相違点が存在することを明らかにした。

第四章「1999 年 921 大地震の記念碑」 阪神淡路大震災の 4 年後に 921（集集）大地震が発生、死者 2,400 名、全壊 51,788 棟に達する被害を生じた。地震記念碑は台中市 6 基、南投県 5 基、雲林県 2 基の計 13 基が存在する。これら記念碑の位置、形態とサイズ、碑文の解読、設置者について詳細に記載している。記念碑の多くは地震の震源となった車籠埔断層に沿って南北方向に分布し、断層や被害記念物の保存地に置かれていること、碑が個性的・芸術的要素を強く示していること、住民の苦情により 1 基が撤去されたことを明らかにしている。

第五章「台湾における地震関連の慰霊行事」 地震犠牲者の追悼および記憶の継承を目的に台湾では慰霊行事が行われており、災害文化の象徴として注目される。約 80 年前の日本統治下で発生した新竹-台中地震後に開始された慰霊行事の特徴と現状を検討するとともに、1935 年、1936 年、1937 年の地震発生後 3 年間に実施された慰霊関連行事を明らかにした。さらに、現在まで慰霊行事を継続している后里区、神岡区、清水区の慰霊祭の特徴について、役所および住民への聞き取りと行事への参与観察による調査結果を詳しく報告している。

第六章「考察」 ①1906 年梅山地震の記念碑が医師莊伯容氏個人によって建立されたこと、日本統治の歴史が浅く中国様式の碑であること、2 回の改竄をうけたことを明らかにした。

②新竹-台中地震において、台中州の 3 基は地震 1 年後の 1936 年までに総督府および台中州により建立されたこと、すべて改竄を受けており、内埔と神岡の碑は殉難者追悼碑であり、清水の碑は元来「皇恩無窮」の碑文を刻んだ皇民化運動のシンボルとして建立されたことを明らかにした。形態が同じで巨大な内埔と清水の碑は総督府により、神岡の碑は台

中州により設置されたと推定した。3基とも改竄を受けており、国民党時代の日本統治否定政策下での工作の結果を示している。建立の目的や主体が異なるにもかかわらず3基が今日まで保存され、追悼行事が毎年継続して実施されている点で注目される。すなわち、日本植民地時代の慰霊行事が震災犠牲者の追悼と記憶という災害文化として地域に定着していることを明らかにした。一方、新竹州の7基は地震27日後から1938年までの約3年間に建立されたものである。これら7基の形態に共通性がなく、地域ごとに独自につくられたと推定した。また、6基が慰霊碑であり、大湖の碑のみが震災記念塔であること、昭和の元号に対する改竄が3基にみられ、他の4基には文字の改竄がないことを明らかにした。慰霊行事は大河底で形式的に実施されているのみで、他の6基では行事はなく碑の存在すら忘れられているものが多いという。最後に、両州における記念碑の分布、設置時期、形状、碑文、改竄、慰霊行事について比較検討をおこなっている。

③921大地震の記念碑13基について分布、形態および碑文の解釈、設置目的と設置者、保存状態について調査した結果を詳細に記載している。その結果、地震痕跡を保存するため公園化された場所に建てられた7基の碑は現代的・芸術的なモニュメントであり、素材もさまざまなものを使用していること、碑文に発生日の921を記すものが多いことを指摘した。

④台湾における地震関連の慰霊行事について、歴史と現状を詳しく検討するとともに、今後予想される問題点を指摘している。

⑤総合考察 台湾と日本の地震記念碑を比較検討し、両者の関係、変遷、保存と課題について整理し、台湾における災害記憶の残し方を論じている。とくに、日本統治時代に始まった慰霊行事が今日まで地域で継続されている点を高く評価した。しかし、現在では行政主体による実施の傾向が強く、今後担当者の変更などにより行事が不安定化する危惧を指摘、台中市による統一的な取り組みとすべきこと、住民の主体的参加が必要であることを提言している。

結論 台湾における地震記念碑の特徴および台湾における地震記念碑の歴史的意義について結論を要約している。

## 〔2〕審査結果の要旨

本論文は被害地震の多発地域である台湾の地震記念碑に関する唯一の総括的研究である。かつ、政治的状況が劇的に変化した台湾における地震記念碑と慰霊行事の歴史的意義と変遷を明らかにした独創的な研究である。記念碑として1906年地震に1基、1935年地震に10基、1999年地震に13基の計24基を確認し、史資料類の検討、現地における形態の計測、拓本採取と碑文翻刻、聞き取りや参与観察などの正確な調査法によりオリジナルな成果を集積した。これらをもとに、1)分布と形態的特徴、2)碑文の解説と改竄の有無と実態、3)設置者と設置目的、4)慰霊行事について地理的、歴史的観点から詳細な検討を行い画期的な研究成果をあげている。そして、日本統治初期、統治完成期、そして

民主化期という3時期に設置された記念碑がそれぞれ異なる特徴と設置目的を有することを明らかにした。本研究は台湾における地震記念碑の最初の総括であるとともに、その歴史的意義と変遷を明らかにしている点で学術的価値は高いと評価される。

しかし、以下のような課題が指摘される。

1) 地震記念碑に関する資料提示に不統一や不十分な点がいくつか指摘される。とくに、記念碑に刻字された犠牲者の氏名、碑の改修・改竄に関する資料、説明板などの翻刻と解説について補足調査を必要とする。

2) 日本植民地下での地震記念碑建立に関して総督府、州政府、地域住民の役割と相互の関連性について不確定な面が残る。また、植民地体制下における記念碑の政治的意図や皇民化運動との関わり、本島人と内地人との関係について考察が不十分である。今後、総督府や州関係文書、地元の資料を探索し、この方面の調査と考察を進める必要がある。

3) 新竹-台中地震の記念碑に関して台中州と新竹州とで建立の目的や性質、その後の碑の経緯が大きく異なる理由について、明確な結論が得られていない。福建人と客家人との関係、州政府の方針と関与、住民の日本統治に対する対応など解決すべき点が存在する。さらに、碑や碑文の改竄については国民党体制下における政治状況とその変化から再検討することが重要であると考えられる。

4) 921大地震記念碑について、個別的・芸術的特徴を指摘したが、現代の台湾社会における地震および地震記念碑に関する意識、被災地域における記念碑の意義や住民の関与について考察を進める必要がある。

5) 研究成果を中国語で報告し台湾において周知させるとともに、同地の学会などの批評をうけるようにするべきである。

6) 中国大陆における地震記念碑の特徴および現状を調査するとともに、日本の地震記念碑に関する研究と地域社会における意義を明らかにすることが必要である。これらと台湾の事例との比較研究にもとづき、今後東アジアにおける地震記念碑と慰霊行事を中心とした災害文化の特徴を明らかにする研究に進展させることが期待される。

以上、本論文は台湾における地震記念碑の特徴と歴史的意義を明らかにした唯一の研究である。多種類の史資料類の分析、現地における碑の計測や碑文の拓本作成と解説、聞き取りや慰霊行事への参与観察など多様な調査方法を駆使してオリジナルなデータを集積し、これらにもとづき地震記念碑の歴史的意義を実証したものである。そして、台湾における地震災害とその災害文化の象徴として記念碑が文化財的価値をもち、学術的・教育的に重要な意義を有するものであることを再評価した点で注目される。さらに、地震記念碑が台湾における防災的実践に貢献できる可能性を有することを示した点でも画期的である。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断される。